

アフター・ニュークリア・ファミリー

2012年11月23-25日、東京神田は旧東京電機大学『TRANS ARTS TOKYO』で催される渋谷家の展示「After Nuclear Family」は、どのようなコンセプトを宿しているのだろうか。

まず私たちは、タイトルの「After Nuclear Family」を、「アフター ニュークリア ファミリー」と日本語表記することから始めよう。その片仮名から見えてくるのは、どこにナカグロを入れるかという問題である。ことばの文節化の位置如何によって、この展示タイトルは、二重三重の意味を孕みだすこととなるのだ。

たとえば、「アフターニュークリア・ファミリー」としてのフェーズがある。

私たちは「核後」の世界を生きている。それは言うまでもなく、「3.11」における原発事故以後の、不可視の放射性物質が大気中に飛び交う世界だ。永続的に思えた日常が終わったにしろ、依然として続くにしろ、ひとつの切断面としての「3.11」を経て、私たちの生活は「核」と向き合い、付き合っていかなければならぬ「アフターニュークリア」という状況下にある。付言すれば、それは断じて「ポストニュークリア」ではあり得ない。何故なら何一つ「核」から「脱」してなどいないからだ。私たちがいるのは、無限に思える半減期を抱えた、「^{アフターニュークリア}核後」の世界なのである。

あるいは、「アフター・ニュークリアファミリー」としてのフェーズがある。

戦後の消費社会化と密接に連なるかたちで、「核家族」という幻想はつくられてきた。それは高度経済成長に伴う郊外化や都市化を背景に、ひとつのシステムとして機能し得たのだ。しかし、その幻想がもはや機能不全を起こしているのは自明だ。たとえば、はやくは80年代に映画『逆噴射家族』（石井聰互監督）などによって核家族の瓦解が描かれ、90年代には核家族に代わる居場所としてのストリートや第四空間が前景化し、やがてゼロ年代を経由して、いまや私たちは「シェアハウス」や「オルタナティブ・スペース」が隆盛を極める時代に生きている。「^{アフター・ニュークリアファミリー}核家族後」の世界のなかで、皆が必死に捉まえようとしているのは、新たな「^{ファミリー}家族」のイメージなのだ。

すると、「アフター・ニュー・クリア・ファミリー」という文節も可能であることに気づく。「Nuclear」を「New Clear」へと読み替えた上で、「新しい鮮明な家族」像を再構築すること——ここまで来て私たちは、渋谷家という^{ムーヴメント}運動体そのものの本質がたちあらわれるのを目にすることになるだろう。

「核後」の世界の直中で、戦後日本の象徴たる「核家族」とは異なる「新しい鮮明な家族」を模索し、次なるステージとして提示するヴィジョン、それこそが「アフター・ニュークリア・ファミリー」としての「After Nuclear Family」展なのである。

中島晴矢